有島武郎と志賀直哉

―『暗夜行路』の時任信行をめぐって―

宗　像　和　重

Takeo Arishima and Naoya Shiga

Kazushige Munakata

1

改造之暗夜行路を毎号拝見してゐます。世の中では色々な事をいつてゐるやうですが私は全く感服してゐます。十分ないゝ仕事として完結なさらんことを祈上げます。私は今全く行きづまつて苦しんでゐます。

大正一〇（一九二一）年三月一五日，志賀直哉から小説集『荒絹』（同年二月，春陽堂刊）を贈られた有島武郎は，その礼状の最後を，このように結んでいる。雑誌『改造』において『暗夜行路』の連載が始まったのが，この年の一月であったから，それから間もなくのことにほかならない。「始めての長編だといふので，志賀氏の『暗夜行路』（改造）を，可なりの期待を以て読んだ」という宮島新三郎の時評[1]に代表されるように，この作品が連載開始早々から文壇の関心を集め，たとえばそのなかには，「志賀と云ふ人は，大変立派な小我を持つておいでの方で……」「時任謙作だめだぞ。遊びが綺麗すぎて！」といった調子の，『人間』同人による揶揄的な合評[2]も含まれていたこと，それが志賀の逆鱗に触れて，「以後は「暗夜行路」の批評はやめる方よし」という強い調子の反論[3]が書かれたことなどは，周知のところであろう。「世の中では色々な事をいつてゐるやうですが」という有島の言葉は，そうした事情を念頭に置いているわけだが，続けて「私は全く感服してゐます」という彼の『暗夜行路』受容は，かっこうの話題作を迎えてかしましい文壇の反応とは，かなり様相を異にしているように思われる。

というのも，おそらくこのとき有島が目にしたばかりの『改造』三月号（第三巻第三号）には，前篇の十一から十四まで（現在の形では，第一の十一・十二，および第

二の一・二）が掲載されていたはずだが，それはちょうど，「兎に角僕はもう少し生活をどうかしなければ駄目なんです」という主人公の時任謙作が，東京を離れて，新しく尾道での生活を始めるところであった。冒頭の書簡において，「私は今全く行きづまつて苦しんでゐます」と言わざるを得ないほどの著しい「落潮」感のなかで[4]，「作よりも先づ生活の改造」（『読売新聞』同年一月七日）と発言したばかりであった有島は，たとえば次のような一節を，どんな思いで読んだのであろうか。少し長いが，尾道に発つ前に，時任謙作が兄の信行と交わす会話である。

「働く事が其日々々の食ふ手段になつてゐる奴は未だいいがね。俺のしてゐる事なんかそれだけの必然さもないからね」突然信行はこんな事を云ひ出した。

「時々変な不安な気持になつて仕方がない」

謙作は一寸不思議な気がした。信行にもさう云ふ事があると云ふのが思ひがけない気がした。

「会社をよす気があるの？」

「うん」と信行は首肯いた。「俺は自分のしたい事がもう少し分明したら，すぐよす心算だ」

「先によしたつていいだらう」

「それでもいいが……」かういつて信行は一寸不快な顔をして上を向いた。謙作は少し云ひ過ぎたと思つた。信行には弱い気持があつた。放蕩などから父にも義母にも随分心配をかけながら，彼は妙に親孝行の気質が強かつた。それだけに愛されてもゐたが，かう云ふ決心をするにも父を苦しめる事，父を失望さす事は妙に恐れた。

「どう云ふ事をするつもりなの？」

かう謙作は訊いたが，信行ははつきりした返事をしなかつた。

これを読む有島に，生活のために仕事をする必然性をもたない，時任家の長男信行の「変な不安な気持」への同感がなかったとは思われない。彼もかつて，「自分の為めに，自分の扶養して行かねばならぬ人々の為めに真面目に額から汗を流して働く人を見ると，それは何時でも私に悲壮な感激，正純な情念を湧き立てさせる」にもかかわらず，「この輝かしい世界共通の生活態度に足並みをそろへて行き得ない私は一種の淋しさを感じないではゐられない」という感想を述べたことがあったのである。これは，「若き友の訴へに対して」（『新潮』大正八年七月）に見える言葉だが，同じ文

章の末尾近く，「徐々にではあるとしても，私はやがて私自身を満足するやうな道に私を連れて行く積りだ」という一節にも，『暗夜行路』における信行の「俺は自分のしたい事がもう少し分明したら，すぐよす心算だ」と同様のある優柔不断さ，意志がそのまま行動につながらず，決断を先送りしようとする性格の脆弱さが，うかがえるかもしれない。そういう信行の「弱い気持」を批判し，「先によしたつていいだらう」「どう云ふ事をするつもりなの？」と畳みかける謙作の問いかけに，信行と同様，有島もまた絶句せざるを得なかったのではあるまいか。

2

そのような詰問が有島に痛かったに違いないのは，いうまでもなく彼自身が，「全く行きづまつて苦しんでゐ」る原因を，未だになし得ない生活改造のためである，と考えていたからにほかならない。『暗夜行路』連載開始と同じ一月に発表された文章で，先ほど題名をあげた「作よりも先づ生活の改造」において，「実生活上の事は随分更へて行かなければならない点があるといふことを，私は此の頃になつて段々，痛切に感じて来て居るのです。所が其の実行が，自分一個の詰らない心のこだはりから容易に出来ないといふ事を，はがゆく思つて居ます」と語った彼は，同じ時期の書簡（大正一〇年一月四日付，森義雄宛）でも，「七八年前から親しい友には話して解決したいと思つてゐたことが私の下らない殉情的な躊躇から未だに解決されずにあるのが禍恨となつて私は行きつまつてゐるのです」と告白しているのである。これが，翌年七月の農場解放を含む，財産放棄の決意を物語ることはいうまでもないが，それに踏み切れない「心のこだはり」や「殉情的な躊躇」の背景に，「彼は妙に親孝行の気質が強かつた」という，『暗夜行路』の時任信行にも似た問題を抱えていたことを，見逃すことはできない。次のような一節はどうであろうか。

> 余は，余の生活を全然変へなければならない。近来，特に強くそれを感じつゞけてゐる。然し，余と老いた両親を結んでゐる環境を打ち破ることは不可能である。不可能でなくても，堪へられない位，気の毒なことである。もう二三年このまゝでゐなければならないだらう。

あたかも，信行の独白を聞く思いがするこの文章は，しかし，大正五（一九一六）年三月二六日付の有島の日記の一節である[5]。「七八年前から」と森義雄宛の書簡にいうとおり，彼の生活改造の願望がいかに根深いものであったか，そしてそれにもま

して，「余と老いた両親を結んでゐる環境」がいかに根強いものであったかを，物語るであろう。たとえばこれを，「全く俺は臆病なのだ。二三年前一年程家を持たした事のある或る女とも，約束しながら，仕舞ひに俺はそれを破つて了つた。これは恥づべき事とは思ふが，迚も承知する筈のない父上との衝突が考へてもいやだつたからだ。衝突はいいが，俺が勝つたとしても父上がそれで弱られる事を考へると，俺にはそれを押してやる気にはなれない」という信行の述懐と重ねてみるとき，二人の精神的類縁性は明らかである。このことに関連して言えば，周知のように有島もまた，明治四〇（一九〇七）年には，河野信子との結婚を父の反対から断念せざるを得なかったのであり[6]，有島没後に書かれた志賀直哉の作品「過去」（『女性』大正一五年一〇月）には，これについて次のような感想が記されているのである。

> Tさんは後年他の女と自殺した人であるが，当時は英国でクロポトキンなどと会ひ，さういふ思想に傾き，考としては割に徹底的な方だつたが，実際に他に好きな人があり結婚したいと思ひつつ父の不賛成から，父の選んで呉れた人と結婚しようとして居た。親孝行な性格からモノメニアックな父の心を攪乱するのは忍びないらしかつた。私からすれば年も五つ程上で，私程には簡単に考へられないのかも知れないが，それが当時では私に異様に思はれた。（傍点は引用者）

とすれば，有島と信行との類縁性を，偶然とばかりは言い切れないように思う。もとより，志賀が時任信行に描いたのは，有産階級における典型的な一人の長男の姿なのだが，その造型には上のような有島の印象が，少なからず影を落としている，と考えるべきではあるまいか。もう一つつけ加えるなら，河野信子との結婚問題と時を同じくする明治四〇（一九〇七）年，志賀もまた自家の女中と結婚を約して父と争い，有島が調停に尽力したという事実がある[7]。この調停は実を結ばなかったが，『暗夜行路』において，お栄との結婚問題に端を発した父親との関係をめぐって謙作と信行が交わす，「君が間に入つてゐると，両方が徹底出来ないから，何時まで経つても関係が，きちんとしたところまで落ちつかないよ」「然し俺には，どうかして調停したいと云ふ気があつたのだ。調停が，いつも不徹底なら，仕方がないが，さうばかりも云へないからね……」といった会話（「前篇」第二の十）にも，当時の事情が何程か反映していると見られるのである。

もとより私は，「信行といふ主人公の兄はこれもモデルなしである」と志賀が語っていることを忘れているわけではない。これは，「続創作余談」（『改造』昭和一三年

六月）の一節で，続けて彼は「主人公との関係は私と鎌倉にゐた四つ上の叔父との関係に一寸似てゐるが，性格は故と叔父とは丁度反対な人物にして，尚，一面では主人公とも対照さすやうにしたが，その効果は自分ではよく分らないが，或る程度には成功してゐるやうにも思つてゐる」と語っていたのであった。確かに時任信行が，特定のモデルとは言えぬまでも，この「四つ上の叔父」志賀直方を連想させる存在であることは，これまでも指摘がある。また，作品の冒頭に「武者小路実篤兄に捧ぐ」という献辞が記されている，武者小路実篤のイメージが入り込んでいることも，否定できないであろう。が，信頼すべき年長者としての側面とともに，「主人公とも対照さすやう」なひ弱な側面を合わせもつ，時任家の長男信行に最も近い存在といえば，志賀直哉にとっては，前述の「過去」に示されている如き有島武郎をおいてほかにない，というのが私の判断である[8]。

そしてそうだとすれば，皮肉なことに，今や生活改造の必要を痛感しながら，なおそれに踏み切れないでいた大正一〇(一九二一)年初頭の有島は，『暗夜行路』の時任信行において，まさに自分自身と対面することになったのである。「私は全く感服してゐます」という冒頭の志賀宛書簡は，謙作に批判される信行の「弱い気持」が，ほかならぬ自分自身のものであるという痛切な自覚と，おそらく無縁ではない。だからこそ彼は，「どう云ふ事をするつもりなの？」という謙作の声に背中を押されるように，実生活の改造に向けて自己の立て直しを迫られるのであって，ここに，翌年七月の農場解放を含む財産放棄の企てが，具体的に準備されることになるのである。繰り返すように，有島における実生活改造の願いは根強く，「何んといつても芸術には生活之改造が緊要」(大正九年五月五日付，阪田泰雄宛）であり，「生活がかはつたらもう一つ徹底的なのを書く」（同年六月一二日付，原久米太郎宛）ことを決意していたのであるから，それがどのような形であれ，早晩実現されていたであろうことは，疑うことができない。しかし，そうした決意と同じ時期に，なお「僕は又自分の生活或は思想の変換期に来たのではないかとも感じてゐる。その渡しを渡つてしまはなければ此衰退は治らないのではないかとも思ふ」（同年九月一七日付，足助素一宛）という彼が，その「渡しを渡つてしま」うためには，やはりここにいう『暗夜行路』体験が必要だったように思われるのである。

そういえば，武者小路実篤が「新しき村」の運動を起こしたばかりの大正七（一九一八）年七月，「武者小路兄へ」(『中央公論』）という私信形式の所感を発表した有島は，その前途を危ぶみ，「私はあなたの企てがいかに綿密に思慮され実行されても失敗に終ると思ふものです」と予言したのであった。これが，武者小路にはよほど不服

であったらしく，「武郎さんに何か言はれて確信が爪のあか程でも動くと武郎さんが本当に思ひ込んでゐるならばそれは少し自惚れすぎてゐる気がする」というような反発[9]を招くことにもなるのだが，もとより有島はそのようなことを思い込んでいたわけではない。彼の本意はむしろ，「要するに失敗にせよ，成功にせよ，あなた方の企ては成功です。それが来るべき新しい時代の礎になる事に於ては同じです。日本に始めて行はれやうとするこの企てが，目的に外づれた成功をするよりも，何処までも趣意に徹底して失敗せんことを祈ります」という点にあったのであり，この文章は次のような言葉で結ばれていたのである。

> 未来を御約束するのは滑稽かも知れませんが，私も或る機会の到来と共に，あなたの企てられた所を何等かの形に於て企てようと思つてゐます。而して存分に失敗しようと思つてゐます。

この「武者小路兄へ」の最後の一節は，一般に，有島農場解放の密かな予告であると理解されている[10]。これまで見てきたように，早くから生活改造の志を抱きながら，果たすことができなかった有島にとって，武者小路実篤の果敢な企てが大きな刺激になったであろうことは，想像に難くない。このことは従来から縷々指摘されているが，それとともに，大正一〇（一九二一）年初頭の『暗夜行路』体験もまた，生活改造への重要な契機となったことを，強調したいのである。

その意味では，有島の『暗夜行路』に対する切実な関心は，主人公である時任謙作にもまして，彼自身の否定的自画像たる信行の上に寄せられていた，といっても過言ではない。有島は，以後，時任信行の行方を注視し，そこに自身の姿を重ねながらこの作品と対することになるのだが，実のところそれは，『暗夜行路』発表に到る志賀直哉の関心でもあったのではないか。少なくとも，今日明らかにされている草稿類の多くが，時任家の長男信行の物語として構想されている事実を，どのように考えればよいのであろうか。志賀直哉にとって時任信行とはどのような存在であったのか，しばらく目を転じてみることにしたいと思う。

3

> 私は作品によつて，楽に出来る事もあるが，時々随分手古摺る事がある。「暗夜行路」は中でも手古摺つた物と云へるが，本統に手古摺つたのは「暗夜行路」の前身である「時任謙作」といふ所謂私小説の時だつた。大正元年の秋，尾の道

にゐた頃から書き出し，三年の夏までかかつて，どうしても物にならなかつた。

先ほども言及した，後年の作者による自解「続創作余談」の一節であって，『暗夜行路』を論ずるだれもが引用するものである。また，「『暗夜行路』覚え書」（『長篇小説』第三輯，昭和一二年七月）においても，「「暗夜行路」は自分のその頃の生活を書いて，結局ものにならず捨てて置いたのを，その後，大阪毎日に長篇を出す約束をした時，主人公の境遇を別に作り，出来損なつたものをそれに利用して書き出したもので，「暗夜行路」といふ題も「時任謙作」といふ題では新聞向きでないから変へてくれといふ話で，変へたものだ」という回想がなされている。これらに共通している，私小説「時任謙作」から虚構の長編『暗夜行路』への筋道は，今日の研究によってより詳細に辿られつつあるが，とりわけ三六種類に及ぶ「暗夜行路草稿」（岩波書店版『志賀直哉全集』第六巻，昭和四八年八月）の出現によって明らかにされたことの一つは，主人公の名前が必ずしもはじめから「時任謙作」であったわけではない，という点にあった。

すなわち，紅野敏郎氏の「後記」（同上）にもあるように，「主人公の名前にしても，「自分」「順吉」「俊行」「信行」「高行」などと変っていき，「暗夜行路」という表題の草稿があらわれてきた時点で，「謙作」という名がはじめて出てくる」という事実にほかならない。「おそらくそれらを一括するものとして，かりに『時任謙作』という標題が作者の回想に採用されたもののようである」とする平野謙の推定[11]に従いたいが，それならば志賀は，「時任信行」という標題をこそ，その回想に採用すべきであったかもしれない。「『彼』とか『私』とか『自分』とかは別として，初期には『俊行』，中期には『信行』が主人公の名前である。その間に『大津』や『順吉』がちょいちょいまじる」点に着目し，「『信行』は，われわれの知るかぎり，主人公謙作の兄の名前だったから，これが長い間主人公その人の名前であったとは意外であった」とは，本多秋五氏の「第一印象」でもあった[12]。その主人公「信行」は，いくつかの草稿のなかで，次のような人物として書かれていたのである。

信行とは十才位からの親しい友だつた坂口の兄の芳雄が仏蘭西から八年振りで帰つて来た。それから二三日した午后の事で信行は坂口の家の洋館の二階から，散歩に出やうといふ芳雄について中程で折れ屈つて細い段々を降りて来た。段の下に通路をよけて坂口がボンヤリ立つて居て，先の芳雄を一寸やり過ごした所で眼も使つて，

「ちよつと」と信行に云つた。(草稿13)

〔前欠〕 信行よりは五つ年下の友達が入つて来ないと何となく物足らない気がされたのである。

信行は電話口へ行つた。其所へ出て来た坂口は如何にも勢のない声をして居た。

「今，少し長い物を書きかけて居るんだ。それで昨晩も夜明かしをした」彼はこんな事を云つて出掛ける事を渋つた。(草稿18)

多分坂口の兄の俊夫が独乙から帰つて来て三日目の事だつた。信行は坂口の家の洋館の二階で此久し振りで会つた小供からの友達とはなしてゐた。其晩二人は有楽座の美音会に行く筈で，其前俊夫は築地本願寺の末寺にある俊夫や坂口の祖母にあたる人の墓参りをしたいといつてゐた。信行も散歩旁々其所へ一緒に行く事にしたので，三時頃二人は其部屋を出て行つた。信行が後になつて中程で折れ屈がつた細い段々を降りて来ると，段の下に通路をよけて坂口がボンヤリと立つて居た。坂口は先に立つた兄をやり過ごした所で，眼も一緒に使つて小声で「ちよつと」と云つた。(草稿20)

こうした「信行」を主人公とする草稿類に目を向けるとき，これも平野謙が指摘していることだが[13]，「友人『坂口』との関係を扱った草稿のおびただしいこと」が，やはり注目されなければならないであろう。同じ場面を扱った右の「草稿13」と「草稿20」でも，この後で坂口は，自分の関係していた女が妊娠したらしいことを信行に告げ，助言を求めようとする。両草稿とも，「例の奴に子供が出来たらしいよ」と坂口に言わせているが，主人公と最も深い関わりをもつ友人は常にこの「坂口」（あるいは「阪口」）であり，多くの草稿が二人の確執を中心に据えていることは，平野謙が上の指摘に続けて言うように，「いわゆる私小説の時代には，対父親との関係より対友人関係の方にウェイトがおかれていたのじゃないか」という推定を可能にさせるのである。

が，むしろ問題は，「友人『坂口』との関係」そのものにあるのであって，上の引用に明らかなように，「坂口」は「信行」の子供時分からの友人「芳雄」（あるいは「俊夫」）の弟として，おそらくは五歳ほど年少の友人として設定されているのである。これは，志賀直哉と有島生馬・里見弴兄弟との関係に符号するもので，それゆえ「所謂私小説」と称されるわけだが，「信行」の前身「順吉」を主人公とする草稿におい

ても，この関係は基本的に変わっていない。たとえば引用の最初に掲げた「草稿13」では，前述した紅野敏郎氏の「後記」によれば，「はじめ「順吉」，あるいは「大津」と書いて，それを抹消して「信行」「時任」と変えている」とのことだが，その点からも，「順吉」と「信行」とを同一人物と見做すことができよう。しかも彼は，次の引用が示すように，家督を継ぐべき時任家の長男なのである。

> 垣根を一つ作るんでもその位丁寧に聴かなければ信行には解からなかつた。彼は故意に自家の用には冷淡な顔をしてゐた。十年程前から割りに多い親類づき合は一切しない事にして，一年に一度の年始状すら出さない事にした。祖母や母も最初は何か少しいつたが，近頃はもう何もいはなくなつた。彼は家事には全く何のかゝはりもなしでこれまで来た。只父だけが，少しづゝ家事に興味を持たせうとするらしく，時々株の配当金を銀行へあづけに行くやうな用を彼に命じた。
> (草稿13)

大井村の地所に生垣を作るための手配を命じられて，父の部屋から茶の間に戻ってきた信行の姿を描いた場面だが，このすぐ後には，「信行の幼年時代には，彼の父は仕事の都合で釜山と金沢に行つてゐた。その間信行は一人児として祖父母に愛されて，我儘に育てられた」という一節があり，さらにまた，「信行は十七から基督教徒になつた。此信仰が，一家の基礎（財産）を作るといふ事を目的としてゐる父と彼との間に心持悪くはさまつた。しかし，その頃は彼も矢張り父のやうな実業家になる気でゐた。法科大学で経済学をやらせるといふのが父の考へだつた。信行もその気でゐた。／然し彼は十九になつて文学をやる事にした」という一節もある。つまり，確認するならば，実業家として家を継ぐことを父に強く期待されながら，それとは異なる道を歩こうとするのが，時任家の長男信行なのであり，『暗夜行路』草稿においては，その信行こそが主人公にほかならないのである。

4

この点について，草稿類が明らかになる以前に書かれた竹盛天雄氏の『暗夜行路』論[14]には，「今日，『時任謙作』の主人公設定について「再建」作業することは，きわめて困難であるにちがいない」としながら，「主題が＜父と子＞の確執ということであれば，そのもっとも典型的情勢として，謙作は日本家族制度に繋縛されている長男であり，相続人でなければならぬ。これは絶対の条件ではないか」という指摘が，す

でになされている。時任家の長男信行を主人公とする右の草稿類の出現は，こうした推定の正しさを裏付けるものだが，そうである以上，「実業家＝市民としての独立を要求する＜父＞に対して，謙作は芸術家としての独立生活を要求し，そこに紛争がひきおこされたに相違ない。たとえば，処女創作集出版資金をめぐって，＜父と子＞は激しく対立し論争するはずである」と竹盛氏が続けて言われるように，父と信行との抜き差しならない対立が表面化するのは，避けられないなりゆきであった。それは，このような形で訪れるのである。

「乃公はもう自家の事を貴様にどうして貰はうといふ気はまるでない。貴様は自分ばかり偉い者のやうに独りでいつてるが，乃公はまるで将来望みのない人間だと貴様はもうアキラメてゐるのだ」

信行は真正面から平手で顔を撲ぐられるやうに感じた。彼は興奮から涙を一杯ためて，烈しい調子で，

「私の将来をかれこん(ママ)いふなんか僭越ですよ」といつた。彼の父は殊更落着いて，

「そりや，僭越かも知れない」といつた。(草稿14)

「尾道へ行く前」と題されたこの「草稿14」は，実質的には前に引用した「草稿13」の続きであって，短編集の出版費用をめぐる父との激しい対立から，自活の決意を固めるに到る信行の姿が描かれている。引用部のすぐ前で交わされる，「貴様は小説なんか書いてゐて全体仕舞にどういふ人間にならうといふ希望なのだ」「馬琴なんかも小説家ですが，もつとづうッと偉い人間になるんです」といった二人のやりとりは，やはり「尾の道に行くまでの事」と表題された「草稿２」(主人公は「順吉」) でも描かれ，これらはさらに，「或る男，其姉の死」(『大阪毎日新聞』大正九年一月六日～三月二八日) において，ほとんど同じ言葉で再現されることになる。その意味では，「すくなくとも，謙作家出の顚末が『時任謙作』の大きい山場でないはずがないのだ」(竹盛天雄氏前掲論文) という指摘が肯われるのであって，一般に「時任謙作」と称されている，――その実は時任家の長男信行を主人公とした草稿類の主軸は，平野謙のいう「対友人関係」から「対父親との関係」へと，一歩踏み出そうとしていたことがうかがわれるのである。

しかし問題は，信行と父との衝突を描いた上の「草稿14」が，この直後に中絶を余儀なくされているように，時任信行のいわゆる「武勇伝」[15] がついに日の目を見なか

った，という点にあるのでなければならない。「「暗夜行路」の前身「時任謙作」は永年の父との不和を材料としたもので，私情を超越する事の困難が，若しかしたら，書けなかつた原因であつたかも知れない」という「続創作余談」の自解は，よく知られているであろう。語り手の「自分」が陰鬱な青年「時任信行」の話を聞くという体裁をもつ「不孝者或は「信行遺稿」」（「草稿21」）には，「僕が自分と父との事を書く時書いた後のイヤナ事が想像される，而してそれは行きがゝりから馬鹿気た結果になり得る。それを最も激しい所まで書きたいと思つたのだ。それは実際上必要もあつて恐しい事を予告して置けばそこへ落ち込まずにもゐられやうといふ気があつてだ」という切迫した心情が吐露されているが，この草稿につけられた表題「不孝者或は「信行遺稿」」そのものが，道半ばにして倒れることになる信行の困難な行路を暗示している，といわなければならない。

本統に私は馬鹿者であつた。私は口には色々の事をいつた。部分的には色々の事を知つてゐた。又感じ得る能力も持つてゐた。然し一番大切なものをつかまへ得なかつたのである。現在の私といへどもそれをしつかりとつかまへ得たとは自らも思つてゐない。が，少なくと(ママ)十住心論にある牛の足あとを発見した所までは来たと思ふ。或はもう牛の尾を見てゐるかも知れない。兎も角も手がゝりが出来た。それが実に幸福である。――これまでの私は大切なものをつかまへ得なかつた。而して只々其まわりのコセコセした物をのみ切りと集めてゐたのである。心棒になる物なしに集めた物が何にならう。積んでも積んでもくづれかゝつた。其上に立つて安心する事は出来なかつた。総べては徒労である。

そして，「時任信行」という表題をもつこの「草稿23」は，信行自身の独白体で，「病的にゴーマンになる」かと思えば，すぐにまた「病的に弱い心になつて了ふ」，一言でいえば「本統に私は馬鹿者であつた」という自分の過去が，現在の心境に照らして回顧されている。確かに，これら「草稿21」「草稿23」などの存在は，時任家の長男信行を主人公とする物語の可能性を，志賀直哉がなおも模索し続けていたことを示すであろう。が，「草稿23」の上の引用部の後には，「私は今過去を顧る。私といふ人間は実に取るに足らぬ人間だつたと思ふ。殆ど何一つ感心すべき所のない人間であつたと思ふ。左ういふ人間がよくも今の幸福に到達し得たと思ふ。それには只一つそれの不思議でない事を証明出来るものが残つてゐる。総ての糸は断たれてゐた。然し只一つ細い糸がどうしても断ち切られずに残つてゐた。それは私が仕舞ひまで遂に理

想主義者であつたといふ事である」という述懐が続くのであって，すでに闘いの矛を納めて静謐な心境に入りつつある信行の姿は，これまでの信行像から大きく逸脱，ないしは後退していると言わなければならない。「私情を超越する事の困難」を語った先ほどの「続創作余談」が，続いて「然し間もなく私は「和解」といふ小説に書いたやうな経緯で，大変気持のいい結果で父と和解をした。和解してみれば「時任謙作」といふ小説に対する私の気持は変化して来た」という，実生活上の「和解」の時期[16]が遠くないことを暗示するような，信行像の大きな変化である。しかし，ここには物語の発展の可能性が失われていることも事実であって，この「草稿23」が，信行を主人公にする最後の草稿であることも頷けるのである。そして，この「草稿23」も十分な展開を見ないままに放擲されるに至って，信行は中心人物たる位置を彼の弟謙作に譲ることになるのである。

> 謙作と阪口とは十三四の頃からの友達だつた。二人は互に同級生の誰れよりも親しかつた。殊に謙作は自身の境遇上，他人の愛に餓えて居た。そして，左う云ふ事はなかつたにしろ，二人の関係は或る時には恋愛に近かいまでになつた。其頃謙作は彼の祖父と，祖父とは非常に年の違つた妾のお栄と三人で，下谷根岸のお行の松の近かくに可成り貧しい生活をして居た。彼の兄や姉や弟や妹が父や，後の妻と共に本郷の大きな家で割りに贅沢な生活をして居るのとは凡そ不公平に彼だけが祖父と共に貧しい生活をして居るのを，其頃は未だ裕福な家の児であつた阪口は心から同情を寄せて居た。(草稿28，傍点は引用者)

「暗夜行路」と題されて，主人公「謙作」の名前が始めて登場する，現在の『暗夜行路』に最も近いのが，この「草稿28」である。引用に明らかなように，主人公謙作は友人「阪口」の同級生であり，しかも彼には兄がいる。「草稿13」ほかの主人公信行は時任家の長男であり，「阪口」より五歳ほど年長であったから，ここにいう「彼の兄」こそが，その信行にほかならない。紅野敏郎氏の「後記」によれば，この「草稿28」は，前述した「『暗夜行路』覚え書」でいうところの，「大阪毎日に長篇を出す約束をした時，主人公の境遇を別に作り，出来損なつたものをそれに利用して書き出したもの」であり，『大阪毎日新聞』に「或る男，其姉の死」を連載した後の，大正九（一九二〇）年四月以降の執筆であるという。「大正元年の秋，尾の道にゐた頃から書き出し，三年の夏までかかつて，どうしても物にならなかつた」(「続創作余談」)この作品は，時任家の長男信行から次男謙作へと「主人公の境遇を別に作」り，不義

の子という設定を導入することで，評家からは「日本の家族制度を背景にして展開する，市民対芸術家という第一義的主題を生きるべき，可能潜在的典型像から，時任謙作は脱落したのである」（竹盛天雄氏前掲論文）という厳しい糾弾を受けながらも，翌大正一〇（一九二一）年一月からの連載開始に向けて，大きく踏み出すことになったのである。

5

こうして志賀直哉は，時任信行を主人公とする「所謂私小説」（「続創作余談」）から，時任謙作を主人公とする『暗夜行路』への転進を敢行するのだが，思えばここに到る『暗夜行路』成立への歩みは，自立を求める時任家の長男信行の苦闘と，挫折の過程にほかならなかった，といって過言ではない。しかし，ついに独立した主人公としての地位を獲得できなかった信行は，『暗夜行路』において，主人公謙作が「誰よりも此一人の兄に好意と親みを持つて居た」（「前篇」第一の二）最も身近な肉親「兄の信行」として蘇生するのであって，「この信行というのも，実は志賀直哉にとっては非常にだいじな人物なのではないか」という越智治雄の指摘[17]が肯われるのである。そして，その形象にあたって選びとられたのが，ほかならぬ有島武郎のイメージなのであった。

かくして大正一〇（一九二一）年の初頭，前年からの「落潮」にあえぎ，生活改造の必要を痛感していた有島の前に姿を現したのが，あまりにも自分とよく似た相貌をもつ『暗夜行路』の時任信行であったことは，すでに述べたところである。かつて，三年余の米国留学から帰国した直後，友人にあてた書簡のなかで，「日本に於て長男たるの苦痛は唯其人のみ知る所なり」（明治四〇年六月一八日付，末光績宛）と語っていた有島が，同じ苦痛をもって心弱くうろたえる時任家の長男信行の行方を，いかに切実な関心を抱いて見つめていたかは，想像に難くない。やがて，冒頭に掲げた志賀直哉宛の書簡（大正一〇年三月一五日付）から三カ月後，『改造』六月号（第三巻第六号）の『暗夜行路』に彼が読むことになったのは，禅の世界に入ることで「変な不安な気持」を解消し，「どう云ふ事をするつもりなの？」という謙作の問いかけに答えようとする信行の姿であった。不義の子という出生の秘密を知らされて，尾道から東京に戻ってきた謙作との間に交わされる会話（「前篇」第二の十）である。

「俺はね」信行はこんな風に今度は自身の事を話し出した。「矢張り最近会社をよすつもりだ。お父さんにも一寸云つて見たが，案外簡単に承知しさうなんだ」

「さう。それはいいね。で，何をするつもりなの？」

「禅をやるつもりだ」

謙作は思ひがけない気がして黙つてゐた。

「近頃俺は，つくづくお前を羨しく思ふ。或る意味で，――運命的にといふのか，境遇的にといふのか知らないが，さう云ふ意味ではお前は俺より不幸な人間だ。然し性格的にいふと，遙かに幸福な人間だと思ふ。しかも，何方が，より幸福かといへば勿論性格的に幸福な方が本統の幸福だと思つたよ」

「僕が性格的に少しも幸福なものか。同時に境遇的にも君のいふやうに不幸な人間ぢやあないよ」と反論する謙作に対して，信行は「が，兎に角，俺はお前が俺より恵まれた人間だといふ気がして羨しい。お前は強い。お前は何でもお前の思ふ通りにやつて行かうといふ強い自我を持つてゐる。所が俺にはそれがない。ない事もないが，それが非常に弱いのだ」と応じ，さらに「禅をやるといふのは最近にきめた事だが，今の生活に不満を感じ出したのは随分久しい事だ。所が，どうしても，それを直ぐよす気になれなかつた。いつかお前は直ぐよしたらいいだらうと，簡単にいつたが，それが俺には却々出来なかつた」と，心境を語っている。そして彼は，一カ月後には早くも，「望み通り会社を罷め，鎌倉の西御門といふ処に百姓屋の小さい離れを借り，毎日円覚寺の僧堂に通ふ」(「前篇」二の十一) 生活に入るのである。

このような，漱石作品の人物像とも通う[18]信行の意味については，別に考えなければならないが，「禅をやるつもりだ」という彼の決意に対する謙作の思いがけない気持ちは，これを読む有島のものでもあったに違いない。数カ月後に書かれる「生活といふこと」(『文化生活』大正一〇年一一月) において，「固より生活にも積極的な意味のものと消極的な意味のものとの二つがあるだらう」としたうえで，「積極的な意味の生活となつて来ると，これは真に容易ならざる問題になつて来る。何故ならそれは自分自身だけの問題ではなくなつて来るからだ。こゝで私の意味する積極的の生活といふのは他の人の生活と聯関して考へられねばならぬ生活をいふのだ」と語ることになる有島のめざすところが，信行と同じ方向を向いていたとは思われないからである。いや，むしろ，こうした信行的な生活改造に飽き足りない思いが，彼をより「積極的の生活」へと駆り立てることになったのだ，といえば牽強付会の言に過ぎようか。いずれにしても，有島武郎はここに，生活改造に向けて一歩を踏み出すことになるのだが，それを具体的に跡づけるためには，別稿を用意しなければならない。本稿では，有島武郎と志賀直哉との関わりの一端を，『暗夜行路』における時任信行像の形象に

求めてみたのである。

注

1) 宮島新三郎「新年の小説——志賀氏の『暗夜行路』其の他——」(『早稲田文学』大正一〇年二月)。

2) 小山内薫・久保田万太郎・中戸川吉二・吉井　勇・久米正雄・里見　弴「人間合評——その一——正月号創作」(『人間』大正一〇年二月)。

3) 志賀直哉「「人間」の合評家に——小我なしに大我ありや——」(『読売新聞』大正一〇年二月一〇日)。

4) 「何んだか僕の力はもう終焉に来たのではないかと思つて淋しくさへなる」(大正九年九月一五日付，足助素一宛)，「私には depression が来ました」(同年九月二一日付，八木沢善次宛) など，「落潮」と称されるような，有島の大正九年後半からの著しい創作力の衰退とその意味については，拙稿「有島童話の問題——「偶像破壊」がもたらしたもの——」(早稲田大学教育学部『学術研究』第三十一号，昭和五七年一二月) で考えたことがある。

5) ただし，この日記(「観想録」第十五巻) の原文は英文。ここでは，改造社版『有島武郎全集』第三巻 (昭和六年九月) 所収の編者訳による。

6) 明治四〇 (一九〇七) 年の出来事を振り返った翌年一月二一日付の日記 (「観想録」第十二巻) には，「兵営にある間に起りし結婚の問題は，我が身に癒す可からざる深き疵を与へぬ」とある。

7) この経緯については，「これからの出来事は，田村来り，有島武郎氏に打明け，前の二君と武者と三人にて父に面談，駄目」(明治四〇年九月三日付)，「武郎氏，武者，田村の三氏父と面談」(同年九月九日付) といった，当時の志賀の日記からうかがうことができる。

8) もう一つ，時任信行という名前が，志賀直哉の夭逝した兄直行を連想させることについては，別に考えてみる必要があろう。すなわち，志賀直哉は明治一六 (一八八三) 年二月二〇日，父直温，母銀の次男として生まれたが，明治一三 (一八八〇) 年に生まれた兄の直行が，満二年八か月で夭逝したために，実際上は長男として育てられたのである。志賀にとっては，ありえたかもしれないもう一つの家族像が，時任信行の造型に托されていると見ることも可能かもしれない。

9) 武者小路実篤「六号雑感」(『白樺』大正七年八月)。

10) 武者小路実篤の「新しき村」と有島武郎・志賀直哉の関わりについては，拙稿「「新しき村」と『或る女』——『或る女』成立前夜の問題——」(早稲田大学国文学会『国文学研究』第七十八集，昭和五七年一〇月) において論じた。

11) 平野　謙「志賀直哉と里見弴」(岩波書店刊『志賀直哉全集』月報11，昭和四九年四月)。

12) 本多秋五「『暗夜行路』の草稿類」(岩波書店刊『志賀直哉全集』月報4，昭和四八年八月)。

13) 注11) と同じ。

14) 竹盛天雄「『暗夜行路』素描——抽象的独立人の誕生・変形・連環的持続の芸術——」(『日本近代文学』第三集，昭和四〇年一一月)。

15) 大正元年一二月一日付志賀日記に，「自分の今書いてるものは或る意味で新しい武勇伝である。自分が，勇士でなければそれは下らない話なのである」とある。

16) 周知のように，長年の不和が解消して，父親との和解が成立したのは大正六（一九一七）年八月，その喜びを書いた作品「和解」は，同年一〇月の『黒潮』に発表された。この「草稿23」は，その三年前，大正三（一九一四）年の京都時代に書かれたと推定されている。

17) 越智治雄・紅野敏郎・西垣　勤・三好行雄の各氏によるシンポジウム「「暗夜行路」をめぐって」（『国文学』昭和五一年三月）での発言。この前後を抜き出すと，「信行というのは，草稿でわかってきたわけですけれども，ある意味では「暗夜行路」の主人公の名前だった。この作品のなかでは信行というのは，仕事をやめて禅宗の世界に惹かれてゆくというかたちをとっているわけですね。この信行というのも，実は志賀直哉にとっては非常にだいじな人物なのではないかと思うのですけれども，どうでしょうか」とある。

18) たとえば，国岡彬一氏の「漱石の後期諸作品と「暗夜行路」」（『日本文学』昭和六一年五月）には，『暗夜行路』のなかに「漱石的モチーフと共に漱石的な人物配置もとり入れられて「信行」は兄となり「謙作」が主人公名として浮上してきたと思われる。作品の中でも両者は精神的分身となっていて，作者の中で信行の名がそのまま兄の名と転化しても抵抗はなかったはずである」という指摘がある。

（むなかた　かずしげ　本学専任講師　国文学）